



有田焼が 出品された 万国博覧会の歴史



八代深川栄左衛門からアメリカの手塚らに宛てた手紙(館蔵)

19世紀中葉、つまり日本では幕末から明治という大きな社会変革のころ、欧米各国では万国博覧会(以下万博と表記)が開催されました。これは交通・通信の発達によって、世界的なコミュニケーション網が完成しつつある時代でもありました。

そのような中、嘉永4年(1851)5月に初めて開催されたロンドン万博では約6か月間の開催中、約600万人が訪れました。「万国の産業の成果の大博覧会」であったロンドン万博ではアメリカのライフル銃や輪転機などが出品され、またフランスの工芸デザインの優秀さが評判となりました。

その後、文久2年(1862)のロンドン万博には初めて日本コーナーが設けられ、初代駐日英国公使R・オールコックが収集した日本の美術工芸品(623点)が展示されました。この折、卵殻手の陶磁器製品が出品されていますが、有田あるいは三川内の製品であったかはよくわかりません。

そして、11月12日まで佐賀城本丸歴史館で開催されていた「1867年パリ万博と佐賀藩の挑戦」でも紹介されていたように、慶応3年(1867)4月1日から開催されたパリ万博には、幕府、薩摩藩とともに佐賀藩が参加して有田焼などを出品し、佐野常民ら5人が渡欧しました。その一人、小出千之助の書簡によれば漆器類や異国向けの大花瓶、薄手の碗などの陶磁器類、甲冑陣笠など40数種類、総数約500箱を持参したようですが、ようやく100箱ほどが売れ、400箱が売れ残ったとあります。

花瓶などはいいい値段で売れたものの、皿や碗類は「大厄介」で、展観の造作費用や人件費、運送費など莫大

な赤字を出してしまいました。

明治期に入り、特にフランスではその後3回の万博が開催されましたが、これは生まれ変わりつつあるパリを世界の人々に誇示するためだったとまでいわれています。

明治6年(1873)5月から開催されたオーストリア・ウィーン万博では次ページでも紹介しているように、有田から川原忠次郎が渡欧し、大きな成果を得ました。しかしながら、岩倉全権大使に随行していた佐賀藩出身の久米邦武は有田からの出品に「猶不十分なり」という評価をしています。それもあって、明治9年(1876)のアメリカ・フィラデルフィア万博前年に、八代深川栄左衛門、深海墨之助、辻勝蔵、手塚亀之助らによる合本組織香蘭社が誕生しました。ちなみに社名は『易経』にある「君子の交わりは蘭の香りのごとし」に由来します。

この万博には前述の深海墨之助、手塚亀之助や深川卯三郎らが通訳の江副廉造とともに渡米しましたが、留守を預かる栄左衛門がアメリカの手塚らに宛てた手紙が残っています。その中に「久米(邦武)様より家道具其外御注文相成候由(中略)此釣ランフは私も壺ツ入用候間、都合式ツ御買調可成候事」とあり、現在香蘭社貴賓室に残るガラス製のシャンデリアが、この「釣ランフ(プ)」だったと思われます。

その後もスペイン・バルセロナやアメリカ・シカゴなど各地で開催された万博に有田焼が出品されましたが、必ずしも成果が上がった万博ばかりではなかったのも事実です。

(尾崎 葉子)



皿 季刊 山

No.116

冬 2017

有田町歴史民俗資料館・館報

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其四

有田初の海外渡航者

川原 忠次郎

(嘉永元年?～明治22年1月26日)



川原 忠次郎

明治6年(1873)、日本政府として初めての万国博覧会参加となったオーストリア・ウィーン万国博覧会に、有田から川原忠次郎が参加しました。有田初の海外渡航者でもあり、「博覧會八萬國藝術工業ヲ研究スルノ最好機」として、窯業はもとより農業や測量、造船技術など各産業の育成を目的とした伝習生の一員でもあった彼は、今に伝わる新しい製陶技術を日本にもたらしました(文中敬称略)。

【生い立ち】

川原忠次郎は父善之助44歳の時の子として誕生しています。安政6年(1859)の「有田皿山大樽山竈人別改帳」によれば、川原家は当時酒請(酒造業)を営む善之助と兄周一郎、勘蔵と姉のふみ、妹のさわと母親、祖母、兄嫁の9人家族であったと記録されています。檀那寺は武雄領の芦原にあった光明寺(禅宗)で、鍋島千之丞被官とあります。川原家は酒請のみならず、当時は高価な原料であった窯業材料の釉薬に使う柞灰も、八代深川栄左衛門とともに販売していました。

【ウィーン万国博覧会】

明治6年2月25日、28歳の忠次郎はウィーン万博に参加しています。万博の開催期間は5月1日から11月1日までの6ヶ月間。この間、約700万人の来場者があったと記録されています。

総裁には大隈重信、副総裁には佐野常民と佐賀出身者が占め、お雇い外国人として有田に新しい窯業技術をもたらしたワグネルも参加しています。当館にはこの折に参加したメンバーの集合写真がありますが、これには万博閉会後にオーストリア近辺に滞在し、西欧の進んだ技術を学んでいた伝習生も写っています。

明治期に入り初めて政府として参加した日本は、会場内に日本式庭園を設置しました。もちろん、有田焼も出品されました。博覧会事務局からは泉山の陶石



日本列品所入口内部の図
「壘國博覧会参同記要」より転載

(15斤入り1箱、約9kg)、有田焼花瓶一対が指名されましたが、これらは政府の買い上げで出品され、他の有田焼は高さ5尺(約160cm)の壺、植木鉢、大皿、碗、水差しなどが出品されたと記録されています。出品者は泉山の窯焼きであった深海墨之助の名もありますが、他の窯焼きの名はよくわかりません。

【伝習生として】

博覧会終了後、同県人であった納富介次郎とともに、ボヘミアのエルボーゲン製造所を訪れ、当時「ギブス」と呼ばれていた石膏型の製法を学びました。納富は帰国の際、フランス・セブル製造所を訪れ、忠次郎もまたボヘミア各地の製造所を見学しました。

また、当時国内の窯場にある窯が甚だ粗製であったことから、エルボーゲン製造所の窯の図面を送ってくれるように頼みました。このようにして、我が国の名産である焼物の製造技術を高めて、欧州各地の製品に劣らないものとし、広く内外の日用品としての需要を高めようと努力しました。

帰国後、彼らは学んできた陶磁業や石膏型用法を広めるために全国の著名な産地から生徒を募って伝習を行いました。その後、同10年に工部省に引き継がれていた伝習事業が突然廃止となったために、新たに江戸川製陶所(新宿区牛込)を設立。忠次郎は工長として全国から集まってきた工人を指導しました。この石膏型の普及は川原らの功績として今に続く窯業技術の一つです。

忠次郎は同12年に発足した精磁会社に入社し、同16年にはオランダ・アムステルダム万国博覧会に渡航。帰途、フランス・リモージュで最新式の製陶機械を購入し帰国しましたが、病に侵されていた身を厭わず、その据え付けに東奔西走したためでしょうか、残念ながら同22年、40歳で死去しました。

【参考資料】

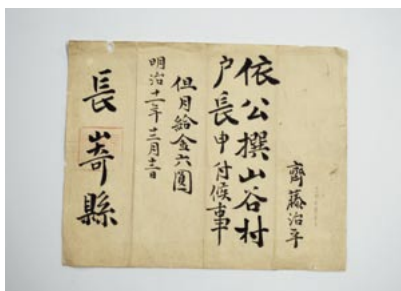
- ・「有田皿山大樽山竈人別改帳」
- ・「壘國博覧会参同記要」
- ・「有田町史 陶業編Ⅰ、Ⅱ」
- ・「ふでばこ 33号 特集万国博覧会」
- ・「肥前陶磁史考」など

企画展 開催中

平成29年度 明治維新150年プレ企画展「知っているようで知らない 明治」を11月18日より開催しています。最近「来年は明治維新150年」という話題をよく耳にしますが、それでは明治という時代に何が起こったのか、というと、意外と知らないことも多く、来年の150年をより楽しむため、この時代の有田のことを紹介しようと企画しました。12月20日まで展示をしています。それではここで展示品の一部を紹介したいと思います。

I. 明治の「有田」

第1章は、明治4年の廃藩置県で佐賀藩がなくなってから、明治22年の町村制施行により有田町・新村・曲川村・大山村が出来るまでを紹介しています。写真は明治11年の山谷村戸長の公選文書になります。明治11年は、佐賀県は長崎県に編入されており、明治16年に復活します。戸長とは町村制が施行される以前の制度である大区・小区制のもとで、小区の長に当たる役職になります。



明治11年 山谷村戸長任命書

II. 万国博覧会

明治期の有田、といえばやはり万国博覧会はずせません。慶応3年パリ万国博覧会への出品を皮切りに、有田焼の万博出品が始まります。写真は明治26年シカゴ万国博覧会の際に有田の城島栄吉に贈られた褒状です。城島栄吉は明治9年の『陶業盟約』に大樽の窯焼きとして名前が残っており、明治33年のパリ万国博覧会にも出品しています。

他にも精磁会社の万博への出品目録や明治37年のセントルイス万国博覧会で、松本政次郎が受賞した賞牌などを展示しています。



明治26年シカゴ万国博覧会の褒状

III. 学校

学校の始まりも、明治時代に遡ります。有田で一番早く開校したのは、学制が開始される前の明治4年に始まった白川校です。また明治16年に開校した曲川・大木・山谷三村組合立涵養(かんよう)小学校(のち涵養尋常高等小学校、涵養高等小学校に改称)に関する資料の中に、試験問題があります。この問題も展示していますので、明治期の小学生がどのような問題を解いていたか試してみたいはいかがでしょうか。



涵養尋常高等小学校の試験問題の一部

IV. まちの動き

明治という時代は変化の時代でした。今までの「幕府」や「藩」の崩壊、外国との競争、また経済的にも好況から一転して不況に陥るなどと混乱した時代でした。このような時代の中で、石場騒動や鉄道建設の顛末など有田で起こった出来事を紹介しています。

写真は明治28年に京都で開催された、第4回国産博覧会の褒状です。表彰されている江副八蔵は上幸平の窯焼きで日本特殊陶業、日本碍子、東洋陶器などの社長を歴任し、有田町長も務めた江副孫右衛門の父になります。この時の内国勧業博覧会で佐賀県の陶磁器は酷評され、それが有田徒弟学校(現在の佐賀県立有田工業高等学校の前身)の建設に拍車をかけることになります。



第4回国産博覧会の褒状

紅葉ライトアップ

今年も恒例の紅葉ライトアップを行いました。今年は10月下旬から、葉が色づく前に枯れ始め、紅葉が見ごろの様子。11月中旬から下旬には落葉しているものも多かったのですが、資料館附属施設である赤絵窯や唐白模型の前の紅葉など、きれいに色づいている部分を中心に、11月24日(金)・25日(土)にライトアップと資料館の夜間開館を行いました。

使用した碗灯は、昨年行われた「日本磁器誕生・有田焼創業400年事業」のオープニングセレモニーの際に使用した、町内の皆さんに絵付けをしてもらったものです。紅葉は少し残念でしたが、かわいらしい絵付けの腕灯のともす明かりが、来館者の皆さんを楽ませてくださいました。(永井 都)





辻昇楽氏「上絵具製造」 国の選定保存技術及び選定保存技術保持者に選定



辻昇楽氏

辻家は江戸時代から続く赤絵屋の子孫で、「上絵具製造」技術は有田町選定保存技術として平成20年に選定されていました。そして、これまでの功績が認められ、平成29年10月2日付けで辻昇楽氏の「上絵具製造」が国の選定保存技術及び選定保存技術保持者に選定されました。同月23日には東京において認定証の交付式が行われました。



れきみん応援団と九州歴史資料館ボランティアとの交流会開催



異人館を案内中のれきみん応援団の皆様

11月14日(火)に、福岡県小郡市にある九州歴史資料館のボランティアの皆様が、杉光館長以下、職員の皆様ともども24名で有田町を訪れ、当館のボランティアであるれきみん応援団（以下応援団）の皆様と交流会が開催されました。

場所は応援団が日ごろ活動されている有田異人館を会場にし、当方の活動内容を説明した後、応援団の皆様方によって異人館の細かな説明を行っていただきました。

今回、訪問された九州歴史資料館のボランティアは登録している方々の半分ほどだそうです。異人館をはじめ当館など熱心に見学いただきました。

企画展の展示や夏の子どもたちを対象にした事業など応援団の活動なくしては当館の運営は成り立たないほどのお力添えをいただいておりますが、今後も引き続き応援をお願いいたします。



松浦水軍まつりに参加しました

10月29日(日)、台風の接近もあり強風の中に開催された長崎県松浦市主催の松浦水軍まつりに、2018年唐船城築城800年記念事業のPRのため「松浦党有田隊」として参加してきました。山口町長を隊の頭として、有田隊の勇姿を披露してきました。



有田隊の行進中



れきみん応援団研修旅行開催

11月21日(火)、年1回実施しているれきみん応援団の研修旅行を開催しました。研修先は江戸時代、盛んに有田焼を商った芦屋商人のふるさとである福岡県遠賀郡芦屋町。まず、芦屋町歴史民俗資料館を訪問し、学芸員の山田克樹さんに館内を案内していただき、縄文時代から栄えた芦屋の歴史から江戸時代の芦屋商人の活躍などをわかりやすく紹介していただきました。

その後、芦屋町内にある岡湊神社境内に天保10年(1839)に伊万里商人が奉納した常夜灯を見学。改めて伊万里(有田焼)と芦屋商人との密接なかかわりを感じた研修旅行となりました。



岡湊神社の常夜灯の前で

季刊『皿山』

通巻 116 号 (平成 29 年 12 月 1 日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目 4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>